

巻頭言—PHYSOR の思い出

原子力機構 須山賢也

炉物理国際会議は ANS が主体となって実施されている炉物理分野の最大の国際会議である。私の記憶が正しければ、1990 年に仏国で開催された PHYSOR が最初に米国外で開催された会議であったと思う。日本では 1996 年に水戸で、2014 年には京都で開催されている。

(あまり知られていないようだが、PHYSOR90 の予稿集は NEA Data Bank の Computer Program Service から入手できる (<https://www.oecd-nea.org/tools/abstract/detail/nea-1828/>) 同様に数年前のビッグイベント臨界安全国際会議 ICNC2023 の予稿集も登録されている。(<https://www.oecd-nea.org/tools/abstract/detail/nea-1933/>))

PHYSOR90 のオーガナイザーは、仏国の高速炉開発を強力に引っ張っていた Salvatores 氏であったはずであるが、日本でもその名は広く知られており、PHENIX を使った照射後試験 PROFILE の論文を学生時代に読んで彼の名前を知っていた私は、水戸で開催された PHYSOR96 で会場係を仰せつかってマイクを持って会場にいたところ、セッションに参加した氏が近くに座っているのを見つけ、「おおー」と思ったことを未だに覚えている。確か、彼にマイクを渡したような気もする。高速炉の炉物理関係者、NEACRP (現在の NEA/NSC/WPRS の前身となる会議体) や NEA Data Bank 運営委員会などで彼を見慣れている人にはなんのこともないことであったのだろうけども、学位取りたてで研究発表を英語で行うのにもハラハラするぐらいのレベルであった私にとっては、大物が目の前に座っていたことが凄く新鮮かつインパクトのある出来事であった。

一方で、PHYSOR2014 の記憶はと言うと、JAEA 基礎工センター炉物理グループのリーダーとなったことからそのオーガナイズに途中から深く関わることになったインパクトの方が強く、会議の予算や予稿集作成といった実務面で悩んだり対応をしたりした記憶の方がより鮮明に残っている。会議中もパタパタしていて参加者と語り合う時間はそれほど無かったためか会議全体の印象が PHYSOR96 に比べると若干ぼやけているのは残念だが、これが会議の運営側の実態なのかもしれない。

私も齢を重ねて 60 歳近く幾つかの国際会議にも出席して自分の研究発表も勿論行ってきたが、技術的な印象よりも、PHYSOR96 の時のように大物を見かけたとか、誰と何を話したとか、夕食に行ったと言った記憶の方が、国際会議においては遥かに大きなものようだ。そして、その記憶と影響は若い時の方がずっと鮮明で後年へのインパクトが大きいだろう。

今回の PHYSOR にも我が国の炉物理関係者が多く参加し、テクニカルな議論をしてこられたということは、ある意味数年に一度のイベントへの参加という繰り返される出来事なのかもしれないが、参加した皆さん、特に若い参加者の皆さんそれぞれに私が上に書いたような出会いとか（私の場合一方的に彼を認識しただけで出会いでもなんでもないが）発見とか刺激があったのなら、それはまた仕事の次のステップにつながるのではないかと思う。そういった経験と記憶の共有こそが国際会議への参加とその記録のもっとも重要な価値だと信じている。

今般、多くの方のご尽力によって「炉物理の研究」として PHYSOR に参加された方のご経験をまとめて発刊出来ることは、現在の技術レベルの総括のみならず炉物理部会員の経験や感じたことを保存して次世代に繋ぐという点で大きな意義があると思うが、それにとどまらず、参加がかなわなかった方には、寄稿を読み込む事で自分が会場にいたような気持ちに、寄稿された方にはとっては、後年読み返したときに自分が会場で感じたことやその時の新鮮な出会いを是非思い出して頂ければと思う。

ご帰国後のお忙しい時にもかかわらず時間を作って寄稿された皆様のご尽力に深く感謝するとともに、この公刊が、もしかしたら再びあるかもしれない未来の PHYSOR in Japan の参考にもなることを期待している。